

## 中高生向け薬害に関する公開講座 指導計画(1)

平成24年3月作成: 甲府市薬剤師会 生涯学習委員会

# 中高生公開講座ワークショップ 「薬について一緒に考えてみませんか？」

企画・タスク: 内藤貴夫、中村由喜、神津伸治、久田裕児他(甲府市薬剤師会)

講師: 望月眞弓(慶應義塾大学薬学部)

花井十伍(全国薬害被害者団体連絡協議会)

2012年3月17日

## 中高生向け薬害に関する公開講座 指導計画(2)

平成24年3月作成: 甲府市薬剤師会 生涯学習委員会

1. 対象: 主に甲府市内 中高生

2. 資源

人的資源 講師2人 タスク 9人 会場6人 事務局3人

物的資源 記録用ビデオ・カメラ (参加証に同意の署名)  
ラッシャペン、資料ケース、ノート、ボールペン、  
名札、付箋、プロジェクター、ホワイトボード2枚

資料: 日本学校保健会医薬品教育冊子(くすりの正しい使い方 中学生版)、

厚生労働省薬害資料(薬害って何だろう)

### 1. 題材設定の理由

目標: 薬害にはどのようなことがあったのか、どうして起きたのか、防ぐために私たちはどうしていけばよいのかについて考える。

現在の中高生にとり薬は簡単に入手できる環境である。その中で薬の正しい使い方、薬のリスクについて知る機会はあるが、「薬害」について学ぶ機会はあまりない。今回「薬害」について正しく理解し、被害者の方の話を聞き、対話する経験の中で、過去の問題としてではなく、将来のための学習となるよう考え設定した。

### 2. 指導のねらい

- ・代表的な薬害について話を聞き、どのようなものだったか確認する。
- ・薬害発生についてどのような共通点があるのか考え、グループで討議する。
- ・被害者は、どのようなことに苦しんできたのかを聞き、考える。
- ・被害者は薬害をどのように考えているのか対話し、まとめる。
- ・薬害被害により、どのような制度ができたのかを知る。
- ・関係者にはそれぞれどのような役割があるのか考え、討議する。
- ・私たちができることはなにか、討議しまとめる。
- ・自分の知らなかったことを知り、自分の考えたことを発言し、初対面の友達とも討議できる。

## 参加者・スタッフ

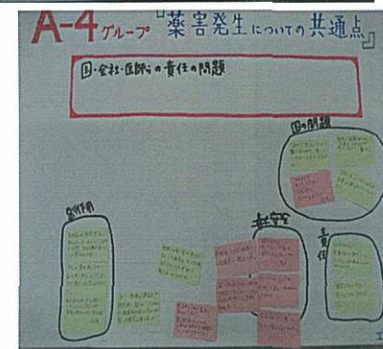
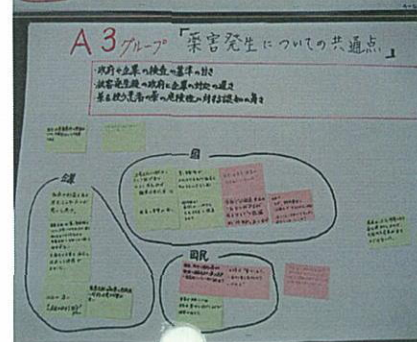
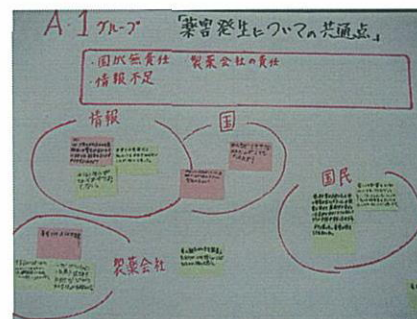
- ・ 中学生 14名
- ・ 高校生 45名
- ・ 司会 1名
- ・ タスク 9名
- ・ 資料配布 2名
- ・ その他 8名

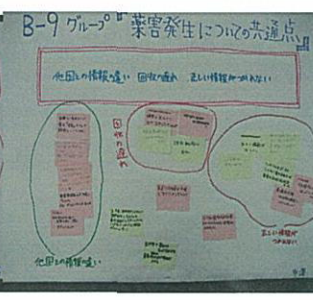
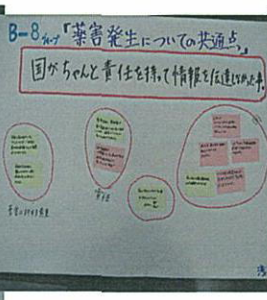
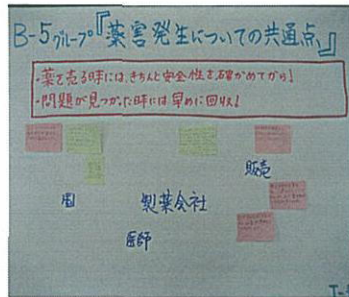
# 展開

1. 薬の正しい使い方 15分
2. 代表的な薬害、歴史について知る 45分  
(講義 15分、SGD 20分)
3. 薬害被害者の方から直接お話を聴き、苦しんできたこと知り、どのように被害者の方が考えているかを知る。 40分  
(講義 20分、対話 20分)
4. なぜ薬害は起こったのか、薬害によりできた制度について知る 15分
5. 薬害はどうすれば防げるだろう？(SGD)30分
6. まとめ 20分

## プロダクト1「薬害発生についての共通点を考える」

「くすりの正しい使い方」、「薬害、薬害の歴史」について、また作業の説明など含めて講義(15分) 講師:望月





## プロダクト2「どうすれば薬害が起こらない社会になるのだろう... 私たちにできること」

**A-1 国民（消費者）**  
あなたがこれから、薬を使う時、どうしていったらよいと考えますか？

- 自分が飲む薬について、よく知る。
- 薬を使った人の話を聞く。
- 正しい情報をくれる人、相談できる人を見つける。
- 副作用が自分に出してしまった場合、情報を公開する。

**A-2 医療従事者**  
あなたがもし医療従事者であったとしたら、その役割を果たすためには具体的にどのようなことをすればよいか。

- 患者に対して、海外の情報も含めて、しっかり説明する。
- 患者の様子を国や製薬会社に伝える。
- 患者と製薬会社を結びつける。

**A-3 製薬会社**  
製薬会社としての役割を果たすためには、具体的にどのようなことをすればよいか。

- 少しでも薬剤の危険性がわかった時点で製造を停止する。
- PMDAや他の企業と協力して薬をつくることで、問題点や改善点などを見つけていく。
- 開発段階での検討の繰り返し。
- 薬の安全性の基準をつくる。薬も商品として扱うならば、当然利用者が評価が下されるべき。噂レベルでの評価を渡さず、きちんと被害を防ぐ。
- インターネットに薬についてのレビューを書けるようなサイトを設置する。

**A-4 国/PMDA 医薬品医療機器総合機構**  
国としての役割を果たすためには、具体的にどのようなことをすればよいか。

- 責任を明確にしておく。
- 薬の販売や承認のときに、海外の意見も参考にすべきだと思う。
- 外国と薬についての情報を共有しあう。
- 副作用が報告しやすい、情報が伝わりやすい制度をつくる。
- 国同士で、よかった情報や、ここは悪い副作用があらわれた、などという自国でこれをふまえてもって話し合いの場をもつべきだ。

**Aチーム 私たちにできること**

- 自分なりに薬害に対する考えをもち、薬害が起こらないような社会をつくっていけるよう自分から行動を起こす。
- ただ受け取った薬を使うだけでなく、自分でもその薬がどのような薬剤か考え、副作用もあるかもしれないなどと考えながら薬を使う。
- 国・医療従事者・国民・製薬会社、それぞれが持っている情報を共有し合い、薬害を未然に防ぐ。
- 国民一人ひとりが薬害について関心をもつ。

## 薬害被害者の方の話を聴き、対話する。



### 主な意見

- (1) 薬害被害者の方は、どのようなことに苦しんできましたか。
- 被害者に対する偏見や差別
  - 病気が社会に正しく認識されないこと。
  - 治療法が見つかるまでは、いつ死ぬか分からないという恐怖
  - 若くして亡くなってしまいう可能性や、実際に亡くなった家族に対する悲しさ
- (2) 薬害被害者の方は、薬害についてどのように考えていましたか。
- 一度は落ち込むが前を向いていく、社会がどうあるべきか。
  - 薬害再発防止をしたい。
  - 薬害をこれ以上社会に広めてはならないと考えるようになった。
  - もう二度とこのようなことが起きないようにしたい。絶対に風化させてはいけない。
  - 自分の不運を嘆くだけでなく、経験を次に生かしてほしいという前向きな意識

## プロダクト2「どうすれば薬害が起こらない社会になるのだろう... 私たちにできること」

**B-5 国民（消費者）**  
あなたがこれから、薬を使う時、どうしていったらよいと考えますか？

- 薬害や副作用についても知識を身につける。
- 薬の使用法を守る。

**B-7 製薬会社**  
製薬会社としての役割を果たすためには、具体的にどのようなことをすればよいか。

- 安全性の徹底と共に、少しでも心配があったら発売しない。
- 国に任せきりにしない。
- 情報を国民に開示する。（ホームページなどで）

**B-6 医療従事者**  
あなたがもし医療従事者であったとしたら、その役割を果たすためには具体的にどのようなことをすればよいか。

- 患者さんの情報を聞きとらさない。
- 薬によってた症状・被害を製薬会社に伝える。
- 患者に出す薬を海外から文献を取り寄せ、医師自身が考え薬を提供する。
- 用法・用量を守ることの大切さを、患者に説明する。
- 患者さんに薬をよく理解してもらおう。
- 製薬会社ともよく話し合っ薬を使う。

**B-9 製薬会社**  
製薬会社としての役割を果たすためには、具体的にどのようなことをすればよいか。

- 正しい情報を提供する。
- 問題が起きたらすぐに回収する。
- 薬を使う人たちの安全を第一に考える。
- 何度も実験を繰り返して、副作用を減らすように安全確認をする。
- 副作用をおさえる薬を開発する。

**B-9 医療従事者**  
あなたがもし医療従事者であったとしたら、その役割を果たすためには具体的にどのようなことをすればよいか。

- 処方するときに薬の副作用・副作用を十分に説明する。
- 医療従事者としての責任を持って、薬の詳細で正確な情報を受け取る。
- 不確定な情報は広めない。
- 4つで協力する。

**B-8, B-9 国/PMDA 医薬品医療機器総合機構**  
国としての役割を果たすためには、具体的にどのようなことをすればよいか。

- 法律で決める。（副作用が出たら、販売を中止する。）
- 全ての薬害を起こさないための情報管理室を作る。
- 医療従事者・薬局に薬害セミナーを義務づける。
- 過去に薬害をもたらした薬と似たようなものは製造しないように義務づける。
- 問題が起きた時に、製造・販売の中止を製薬会社に素早く命じる。
- データが不足している場合は販売は許可しない。
- データ不足を解消するために、安全を確認するための項目を増やす。
- 国民に薬についての詳しい情報をしっかり伝える。
- 薬害被害者のその後の保障をする。

**Bチーム 私たちにできること**

- 一人ひとりが意識と知識を持つ。
- 正しい情報を、それぞれの立場が共有する。
- （麻薬などのダメゼッケー教育のような）学校で薬の教育をする。

# 終了後の受講者アンケート

- ・ 今日参加してどう思いましたか。どのくらいの気持ちか、印を書いてください。  
～回答者60名～
- ・ [とてもよかったを評価6][つまらなかったを評価1]として
  - ・ 評価6 53名
  - ・ 評価5.5 1名
  - ・ 評価5 5名
  - ・ 評価4.5 1名

## 2. 今後、薬害が起こらない社会の仕組みのために、あなたにできることは何だと考えますか。(主な意見)

- ・ 携帯のアプリで薬の情報や使用方法などがわかるようなものが作れたら良いのではないかな。
- ・ 薬害被害者の話に耳を傾け、そのようなことが2度と起こらない社会を協力して作り上げていくことだと思います。薬に対する意識と知識をきちんと持って様々な面から考えていきたいです。
- ・ 薬について説明を読むことなど些細なことから、薬を使ったりもらったりするときにその薬に関して関心を持つことや、他人と自分の持っている情報を共有する。
- ・ 国民ひとりひとりの私たちも、意識して情報を得ていかななくてはいけない。でもそのためにはもっと薬の情報を得やすい社会になってほしい。
- ・ 薬の一使用者として評価、感想を公表すること。
- ・ 今は高校生なので特別なことはなにもできないけれど、薬に関心を持っていきたいと思う。
- ・ 今の段階で自分にできることは薬害についての意識を強く持って、薬と接していくことです。しかし将来的には、私は医者になりたいと思っていますので、勉強をがんばって医者になり、自分の患者さんにはこのようなことが起こらないように、薬についての知識をいつまでも熱心に調べていきたいです。

## 1. 薬害についてどのようなことを考えましたか。(主な意見)

- ・ 私は今までこんなにたくさんの薬害があることを知らなかったのでも勉強になりました。製薬会社や医師、薬剤師など全員が協力することで薬害はへらせると思いました。
- ・ 副作用はさけられないことだけど、死ぬときまで障害が残ったり、死に至ったりするような副作用がある薬品を見て見ぬふりをして野離しにしておく。絶対にはならないことだと思った。
- ・ さまざまな薬害がおきて少しずつ薬の管理や創薬についてルールがきびしくなり、失敗しないと気付けないのはひにくだが仕方のないところでもあると思う。体質とか人にはいろいろ違いがあるから薬害をなくすことはできないのかもしれない。今ある知識を十分に学び薬害を最小限にしていけばいいと思った。
- ・ 防げる事故なのに、どうして防げないのかすごく疑問に思った。情報の共有が一番の防止だと思うので、一刻も早くそうしてほしいと思った。
- ・ 国や企業の責任だけを考えるのではなく、私たちや学者さんたちを含めた情報の共有をして、問題点や改善点を出しあい、連携を高めていくことが薬害を減らすことにつながると思った。
- ・ 今まで、何となく知っているようで、全然知らなかったことがたくさんありました。過去に薬害によって被害を受けた人々が、どんなに苦しんできて、又、そのとこをきっかけに現状をさらに良くしようと努力してきたことを知りました。

## タスクの主な感想

- ・ 私のテーブルは高一生だったのですが、すごく反応が良くとてもやりやすかったです。既にこちらの求めている答えが出てくるので、それをどこまで口出してよいか初めての為、見極めが難しかったです。
- ・ 時間配分も完璧だったと思います。学生も飽きる事なく最後まで頑張ってくれてとても良かったです。
- ・ 何となく沈黙してしまう感じのグループでしたが最終的にはきちんとまとめられてよかったのですが、開始時はどうしようと思ったのが実感です。
- ・ 中学生にとって前半のテーマはわかりにくく、プロダクトになるまで時間がかかってしまいました。副作用と薬害の違いがどうしても理解できなかったようです。後半は、自分たちに置き換えて考えることで少しずつ意見も出てよかったと思いました。
- ・ 中学生のグループとのこともあって心配しましたが意見は皆から出ましたので良かったと思います。ただ時間におわれる作業なので多少介入しないと進まない面もありました。
- ・ 最初の活動を付箋にしたことで全員が口を開いたことは良かったです。
- ・ 高2のグループについて言えばタスクがあまり関わらなくても自分たちの意見をまとめられていました。(中学生には難しかったでしょうか?)
- ・ 全体的にやっぱり難しいという感じはありましたが子供たちがついてきていました。学校の授業ですとなると、中3以上だと思えます。中1、中2の子たちには「国」という捉え方がまだ出来ていないので。
- ・ 今日Specialな方の話が聞けたので良かったです。現場でこの授業をするとなると、DVDなどの視覚教材、あるいはゲストティーチャーとして話をしてもらおうと効果upだと思います。ぜひ厚労省でそのような教材作成を望みます。
- ・ 薬害という少し難しいテーマで中高生に対しては大変ではないかと最初は思いました。でも、始まってみると皆さんから積極的な意見が多く出てきて大変価値のある時間だったと思います。進行についても特に問題はなく、時間配分もちょうど良かったと思います。今日感じている少し多くの参加者にでも対応できるような気もします。

## 実施した感想

- 冊子の構成は適切でしたが、内容が中学3年生レベルには難しいという印象でした。
- 被害者の直接のお話と対話が効果的でした。  
(直接は無理でもビデオなどで拝聴することができるとよいと思います。)
- 生徒が自ら考え討議する形を取り入れるのもよいと思います。(初対面は少し難しいところがありますが、同じクラス等であればアイスブレイキングが必要なくなるます)
- 中学・高校の先生と薬剤師等の両方が関わるのがより理想的ではないかと感じました。